能評と劇評

觀照

昭和二十四年六月廿五日印刷
昭和二十四年六月三十日發行
（毎月一回發行）

をどり閑話

坂東三津五郎

幕内祕錄

石割松太郎遺稿

昭和二十四年六月

22

謡本は・能樂書林

観世流謡曲 百番集

並製 表紙薄茶クロース巻水金押 價七五〇圓 送書留七〇圓

特製 表紙茶地鶯色紋革クロース 價八五〇圓 送書留七〇圓

人氣曲百番に「神歌」を添へ百一番收載。素謡標準時間、稽古順、能舞臺圖解、等各種索引を附す。戰後新企劃による最良の「旅の友」

グラビヤ用紙印刷菊半截判 横綴洋裝一〇五〇頁。函入

観世流謡曲教本 全十卷 規格判 第三卷まで出來發賣中 送費第四種各卷二〇圓

第一卷 謡の總心得、鶴亀、橋辨慶、土蜘蛛……價一二〇圓

第二卷 竹生島、經政、吉野天人、菊慈童、紅葉狩……價一五〇圓

第三卷 賀茂、田村、羽衣、小袖曽我、船辨慶……價一五〇圓

右三册まとめて御註文に限り特價四〇〇圓。別に「愛藏本」と稱する豪華本あり。本文和紙印刷、表紙鳥の子木版手摺。價各二〇〇圓

観世流 獨吟小謡集 美濃四截洋裝横本二三六頁 價一八〇圓 送四種一五圓

獨吟小謡長短三百章を收載。類題索引を附す。ポケット用の愛吟集

寶生新自傳 野上豊一郎編 價二一〇圓 送二〇圓

能の演出研究 三宅襄著 價八〇圓 送二〇圓

大臣柱 野上豊一郎著 價七〇圓 送二〇圓

能百句 野上豊一郎著 價三五圓 送一〇圓

延年資料その他 本田安次著 價七〇圓 送二〇圓

稽古本在庫表・發行書目御申越次第送呈

東京都千代田區神田神保町三ノ六

能樂書林

電話九段(33)〇八一三・二二八五

振替東京二一〇三〇番

目次 (1949年6月)

観照(第廿二號)

なごり閑話……坂東三津五郎……3

幕内秘錄……石割松太郎遺稿……11

劇評

猿之助の操三番……武智鐵二……15

敢て誤る者…(五月中座)……沼艸雨……15

劍劇の亡靈…(建直らぬ新國劇)……北岸佑吉……16

須磨の仇浪…(歌舞技座の新派)……林秀雄……18

新劇への不滿…(民藝の山脈)……升屋治三郎……18

「わが町」への疑問……梅本重信……20

能評

お東の遠忌能……北岸佑吉……21

觀尚會能と新樣式能……武智鐵二……22

六平太の「景清」…(各會の能集成)……沼艸雨……23

觀照……26

編輯後記……28

をどり閑話

坂東三津五郎

昨秋、高血壓といふ恐ろしい症狀を危機の一歩手前で喰止めて、京都下鴨の自邸でひたすら療養につとめてゐた坂東三津五郎丈は意外に早く健康を恢復して六ケ月ぶりで舞台に復歸し、三月の大阪歌舞伎座に引つゞき、四、五月は東京劇場に出演、舞台に名品の藝をみせた。介添への妻女と泊り込みの樂屋に丈を訪ねて、開幕前の靜閑なひとき、名人の境地を極めた舞踊について興趣つきぬ藝談を聽くことが出來た。（大西重孝）

高血壓の危機

病氣中はみなさまにいろ〳〵御心配をおかけしましたが、どうやら元の身体になりましたので、まる半年ぶりで舞台に立たせて頂きました。

昨年の十月五日のことでした。朝から私宅に名取りのものが大勢集つてお稽古をいたしてをりましたがもうこの邊でお休みにしてお晝の食事をいたゞかうぢやないかといふことになりまして食膳に向ひましたところが、手に持つた箸がパラリと落ちました。私もおかしいと思ひましたが家内が大へんびつくりしまして、すぐさま手や指先を撫でるやら揉むやらしてくれましたら、どうやらもう一度箸を持つことが出來ました。

ところがまた夕食の時に同じやうに箸を落しました。さア大變と倅の簑助が早速谷崎潤一郎先生のお宅へ電話をして事の樣子を申上げて、先生のおかゝりつけの阪大の布施先生を呼んでいたゞかうとしました。と申しますのは先生がかね〳〵同じ高血壓にお惱みになつてをられた事を承つてをりましたからであります。

それで明日その布施先生の御來診を仰ぐことゝして取敢へず御近所にをられますこれもおかゝりつけの先生をお差向け下さいました。早速血壓を計つていたゞきますと、なんと二六五もあるといふのです。實に危いところでした。もつとも私もこれが氣がゝりでしたので近くのお醫者さまに診ていたゞいてをりましたが一八〇ぐらひだといふのですつかり油斷してをりましたが、その血壓計が壞れてゐたのですね。谷崎先生からのお醫者さまがみえました時には入浴してをりましたが、とんでもない、そんなことをしては大變ぢやないかときついお叱りを受けました。なにも知らぬといふものは實に無鐵砲なことをするものです。只今思つ

てさへゾッといたします。

それで翌日布施先生の御來診をうけましてから瀉血など手厚いお手當をうけまして、このやうに元氣な身體にしていたゞきました。

どうやら血壓も下りましてから、もうそろ〳〵植物園ぐらひまで散歩してもよろしいとお許しが出ましても、さて表通りまで出ると、足がすくんで前へ進みません。すぐ引返すやうな始末で、孫達から祖父さんは臆病だと笑はれましたが、なか〳〵自信のつかないものです。こうして元氣で廿五日間の興行も無事に勤めさせていたゞく身體になりましたのは全く布施先生や谷崎先生やみなさまの御厚意によるものと有難く思つてをります。幸四郎さん、宗十郎さんと相ついでの御不幸で、われ〳〵年輩のものももう何人もをりませんので、身體だけは大切にいたしたいと思つてをります。

文屋と喜撰

三月は「六歌仙」の文屋と「大津繪」の座頭とを踊らせていたゞきました。文屋は安公卿の心もちでなどるものでありますが「つきつけられて恥しい」で官女にとられた烏帽子を取返して顔をかくすやうにいたしますところを皆さまは珍らしいと御覽になるやうでありますが、これは古くからある型で歌右衛門さんの始められた振りであります。

公卿は烏帽子をぬいだ姿を人さまに見られるのを非常に嫌つたものなので、それを官女に取られて恥しがるのがこの振りの意味なのであります。それを九代目（團十郎）の伯父さんが例の活歴から公卿は烏帽子をぬいではならないものとの解釋でおとりにならなかつたもので、その後はそれを見習つて誰方も烏帽子はぬがないといふ型でされるのです。このあひだも花柳芳次郎師匠が來ましてそれはよい振りをみせてくれました。それで説明がつきますと悦んでくれました。

それで後に烏帽子と狩衣とをとりました恰好が文句通り法印さんになつてゐるのでありますが、昔の型はよく考へてあつて面白いと思ひます

「富士や淺間」の煙のところは一つの仕どころになつてをりますが、これをもく〳〵と煙が立上る振りにしますと、まるで淺間山爆發の最中といふことになります。淺間は噴火山には相違ありませんが、それでは誠に雅といふものがないと花柳勝次郎師匠がよく申されてをりました。それでこゝは例へばお線香のけむりといつた心でいたしてをります。文屋は官女などをつかつていろ〳〵動きがありますが、私は喜撰よりは樂だと思つてをります。

座頭は「大津繪」の一つで、通常

「ひよつくりの座頭」と申してをりますが、藤娘、奴、天神、船頭それにこの座頭と、五つをもつて「大津繪」と申しますので、最初の瓢簞鯰だけは「繪拔け」の方のものであります。

今度は「さやを廻ろか」の田舍節と伊勢音頭とは省略いたしてをりますが、をどりには別に苦勞があるものではありません。たゞ盲目の心でをどるのが厄介なので、ついをどつてゐるあひだに目あきになつて了ふのを注意をしてをればよろしいのであります。

舞と踊の區別

このあひだ武智さんから舞と踊との區別についての御質問をうけましたが、これはなか〳〵難しい問題だと思ひます。踊の方は身體全体を動かしてする振り――もつともこの場合、腰が据つてをりませんと踊れないものですが、肩をつかひ手足をつかつて身體全体を拍子にあはせて動かすのが踊りだと思つてをりますがいかゞなものでせう。

舞の方は踊のやうに身體をあまり動かしてはならないものでせうゞなにしろ舞は能が基調になつてゐるもので、能は身體はあまり動かされてをりませんが、足はしよつちゆう動いてをります。鏡板の松の繪を背景にして拜見してをりますと身體が上下せずに舞つてをられるのがハツキリいたします。名人の舞になればなるほどそれが目立たないのでいつも感心してをります。

舞も能と同じ道理で舞ふものだと思ひます。踊も昔は舞のやうに足數などはキチン〳〵と決つてゐたもので、それでないと踊れないものでありますが、今日では崩れてゐるのが多いやうで、この足數の決つてゐるゐないで二つを區別することは出來ません。

花柳勝次郎師匠は非常に足のことを喧しく申されました。長唄の「浦島」を稽古していたゞいてをります時に、「寢ざめ心に辿りくる」の足さばきがそれでは水の上の心になつてゐないと喧しく申されまして、この花道の件ばかりを半年もくり返し習ひましたが「浦島」はこゝばかりで後は誰でも教へてくれるといはれて、教はりませんでした。

「まかしよ」のやうに振りの速いものは足數はこゝでいくらと決つてをりまして、いくつ出て、いくつ戻ると元の位置に歸るやうに決つてをります。近ごろでは氣分本位に踊りますので足のことなど嚴しくいはなくなりました。たゞそれだけのことであります。

踊は振りから振りに移るのがむづかしいものであります。かはり目が判らなくてはいけませんが、それが

角立つてはよくありません。近ごろは人に教へる時に口で申しますのでついかはり目〳〵がはつきりして來たやうであります。

手ほどき時代

私は幼いころはなか〳〵の惡戯もので、踊のお稽古などはどうしても熱心になれませんでした。成駒屋(先々代芝翫)さんのところで御厄介になつてをりましたころ、さアお稽古だといふころになりますと、御不淨へ入つて一時間も出て來ないといふ有樣です。

さて踊の手ほどきは八才のころ、九代目さんのお勸めで先代藤間勘右衞門さんにうけましたが、朝から午後まで稽古していたゞいても、一向先へ進みません。そのころお稽古にあがりますと、丁度着到板のやうなものへ、自分の名札をかけて、その順番でお稽古をうけるのでありますが、私が物覺えがわるいため、しよつちゅう師匠のお叱りをうけて御機嫌を損じますので、後から來たお弟子達がその飛ばッ散りを喰つては大へんと、私の後になるのを嫌つて四五人間をおかねば名札をかけないものもあるといふ始末であります。その叱られ仲間にはこのあひだ亡くなつた高橋(左團次)などがをりました。その高橋も、君はしよつちゅうをどつてゐるが、私はすつかりだめだとこぼしてをりました。

その後、午前中を勘右衞門師匠のところでお稽古をして、午後になりますと勝次郎師匠のところへ通ふやうになりましたが、この師匠がなかなか口喧しい方でありましたので、つい目と鼻とのあひだにある淺草茅町までが思ふやうに足が進まなかつたものであります。

芝翫さんのところへ參りましたのは十才のころで、師匠よりもおかみさんのおみちさんに主として稽古をつけていたゞきましたが、こゝでは「近江のお兼」と「供奴」とを習ひましたが、これもはか〳〵しくありません。

「供奴」の初めの「して來いな」がうまく參りません。もう一度と「して來いな」とやり直すのですが、ここで、きまつたやうに表通りをおもちや屋が通ります。そのおもちや屋の呼び聲が「ラッパやラッパー」といふのですが、毎日「して來いな」を繰返してゐると、「ラッパやラッパー」と來るものですから、しまひには私のことをラッパの坊ちやんと呼ぶやうになりました。

そして時々芝翫さんがみえて「坊ややつてるネ、うまくをどれたら、これをやるよ——」と帶のあひだから無双の金時計を出して見せられるのでした。御本人はほかに當時流行の百卷きの時計といふ安時計をもつ

てをられましたが、百卷きの方が大きかつたので、この安時計の方が上等だと思つてゐられたといふ大へん無邪氣な方でありました。私もそれが欲しさに一生懸命に習ひましたが時計はいたゞくことが出來ず、おもちやを買つていたゞきました記憶があります。

名人勝次郎師匠

花柳勝次郎師匠は名人でありました。なか〳〵足のことを喧しく申されまして、そんなに兩足をつかつてはいけないと申されるのですが、踊ををどるのにどうして兩の足をつかつては惡いのか、十五才の私にはどうしてもそのわけが判りません。今日でこそ右か左かどちらか中心になる方に力を入れて、片方からは力を抜かなければをどれないものと承知してをります。それを最初から仰言つて下されればよく判るのですが、兩足をつかつてはいけない〳〵と申されるだけで、一向に合點が參らなかつたものであります。

この師匠のところへ通ひ初めましたころ、九代目さんの「關の扉」を二十五日間ずつと拜見してをりましたと申してましたら、それなら一度をどつて御覽といふことになりまして、師匠の前でをどりますと「一体そさまの風俗は」といつて小町を指差すところで、それぢや盲目になつてゐるぢやないかとお叱りをうけました。

私が九代目さんを拜見してをりました位置が平土間の一等後ろの「賣場」と申すところでありましたゝめに、九代目さんの目のつけどころを見落したのでありました。小町が下手にゐるのに、關兵衛が正面で右の足にかゝりますため、首が上手向きになつて、小町を差した指先と、目の方向が喰ひ違ひがちになりますが、肚さへ出來てゐますと、自然目は小町を見上げる形になれるものであります。踊ではこの肚が出來るといふことが大へん大切なことだと存じます。

團十郎はをどりは巧いが振付はおれの方が巧いよと、師匠はよく申してをりました。

「紅葉狩」は九代目さんの振付けられたものと、さうでないものとがありますが、勝次郎師匠は九代目さんの更科姫を見てゐて「田毎の月」といふところで九代目さんは右の扇で右の方へ數へる手附をし、又左の手で同じやうに左へ數へる手附をされましたのを、田毎の月といふのは山の傾斜にいくつも水田が並んでゐるところに月が寫つて、いくつにも見えるのだから勘定は出來ないものだよ、おれならあんなことはしないといつて、平にひらいた扇を細く要を返すやうな手をつかはれましたのが

丁度月の光がキラ〳〵と一つ一つの田に光るやうに見えまして、成程と感心いたしました。

三代目三津江と申す女師匠がをりまして、私もこの人に稽古をしてもらひましたが、九十四才かで亡くなつたといふ長壽の人で、その頃も隨分老齢で耳も遠くなつてゐましたので筆談で教へてもらつたものでありますが「二人若松」の稽古の時などは、男か女師匠に習ふといふことはあなたの恥ですからといつて、雨戸を締められましたが、丁度眞夏のことで、暑くて閉口したことがありました。

また「道成寺」を習ひました時、その道行の「月は程なく」のくだんがこのお婆さんにもかゝはらず、十六七才の美しさに見えたものであります。私も若くて生意氣ざかりのころでありましたから、少々馬鹿にしてをりましたのですが、これには全く驚きました。

先代井上八千代さんが九十いくつのころ、若い藝者衆に「お七」を教へてをられましたとき、その若い子より遙かに色氣があつたので、傍で見物をされてをられたお孫樣の亡くなられた觀世左近さんと片山九郎右衛門さんとが悅し泣きになかれたと申すお話を承つたことがありましたがそれとこれとは丁度一對だと存じます。藝の力の偉大さと申すものはこの邊のところを指すのでせう。

踊に「風」あり

昨年、六代目と猿之助で「草摺引」が出ました。御承知のとほり朝比奈は素袍といふふんわりと大きな衣裳を着てをりますが、この衣裳で、まるくゆつたりとをどつて、しかも荒事になつてゐなければならぬといふ厄介なものです。これが書卸しの時の昔の市川男女藏の風でありまして踊にも「風」と申すものがあります。

「永木ぶり」と申しますのは永木の三津五郎と申しました六代目の振りでありまして、トンとひざを打つて兩手を交互に動かす振りでありますが、このくだんになりますと、きまつて「大和屋」と大向ふがかゝつたものと承つてをります。只今演じてをります「喜撰」の「どう見直して胴震ひ」で兩手をたれて、肩をもむやうに後へ退るところも「永木ぶり」でありません。

「關の扉」は初代中村仲藏さんのものでありますから、まづ仲藏の風を採らねばどれないものであります「どこから來なんしたえ」で切戸の柱に兩手を重ねた形、さきに申しました「一体そさまの風俗は」で小町を指差した振りが、やつぱり仲藏なのであります。私も仲藏さんがどんな方だつたかは、實際存じてゐるわけではありませんが、をどつてみて

この仲藏風でないと振りになりません。

「吾出し三番」は三代目歌右衛門さんが歸坂の名殘として出した所作事でありますが、右の初代中村仲藏がをどつた志賀山流の三番叟を復活したものであります。

仲藏さんは近親者に狂言師がをられましたので、本行のものに造詣が深く、三番叟などを舞はれたのでありますが、歌右衛門さんがこの仲藏さんに踊を習はれたので、「舞の稽古を志賀山の」といつてゐますのはそのためであり、「敎へ請地の親方に」の「請地」と申しますのは仲藏の住居が深川の請地にありましたのを指すもので「目出度う榮えや仲藏を」の「榮屋」は仲藏の家號だつたのであります。したがつてこの所作には仲藏振りが隨所にとり入れられてをりまして「舞の稽古を志賀山の」で肱を張つて手をふつて歩くところは仲藏さんの癖を寫したものと承つてをります。

このやうに振りにはいろ〳〵意味が含まれてをりますものでありますが「供奴」で「浪華師匠のその風俗に似たか」と右手と左手とをいたゞくやうにさしあげますが、これは四代目歌右衛門さんの初演でありますから、師匠と申しますのは三代目さんのことで、師匠を敬ふ心なのであります。今日ではたゞ手をあげるだけで、その意味が失はれさうになつてをります。

三代目歌右衛門さんで思ひ出しましたが、この方の評判をさられました「小原女奴」は私もをどらせていたゞいてをりますが、小原女の蟲の合方で、綾竹を使ひますのと、奴の「やれサテナぬしさ別れちやなァ」のくだんは同じ振りが二つ重ります總じて振りの重なるところは最初の方は簡單にして、後の方を叮嚀にします。それで御見物にも振りのくり返しの面白さを味つていたゞけるものと存じてをります。

人形振り

所作とは違ひますが、「人形振り」と申しますものがあります。人形の方では人間にならうと努めますが、役者のいたします「人形振り」は人形にならうといたします。人形の惡いところと申しますか癖と申しますか、それを眞似ることによつて「人形振り」になるものであります。巧く器用にしようといふのでは人形にはなりません。手足をどうこうするといふ方法はないのでありますが、演者が無心になることが第一なのであります。床と三味線を聞いてゐるだけで、後はすつかり人間であることを忘れてかゝらねばなりません。

私は「藤彌太物語」の藤彌太を勤めましたが、これは名人と呼ばれま

した秀調さんに教へていたゞきました。秀調さんは女形でありましたが先代芝翫さんのをよく覺えておかれましたのを、そのまゝ私が頂戴しましたもので、この藤彌太が少しでも評判をいたゞくことが出來ましたらそれは秀調さんのお蔭だと存じます

囃子のはなし

「片シヤギリ」は今日では能がゝりの狂言の幕明きに用ひますのが常式になつたやうでありますが、本來の意味はさうではありません。一番目狂言が「さらば〳〵」かなにかで幕をしめますと「これより二番目狂言御覽にいれます。そのため口上」とか、口上がありましてから、次の幕のあきます迄のあひだに打ちましたのが「片シヤギリ」であります。これが能がゝりのものゝ幕明きに丁度工合がよろしいので、用ひましたのが、今日の習慣となつたものでありませう。そしてこの「片シヤギリ」は江戸三座と申します中村座、市村座、守田座によつて、それ〴〵打ち方が違つてをりましたものであります。

また「段切の太鼓」と申しますのも、私どもが働いてをりました市村座と、歌舞伎座とでは違つてをりましたやうであります。歌舞伎座へ出演するようになりましてから、六代目とも、どうも違ふと話合ひました。「太十」の段切で「末の世までもオオオオ、オ……」で、テーンと打つと柝頭のチョンで（ヤ）テーン、テーン……とつゞけますのが市村座のやり方でありますが、歌舞伎座の方では、柝が入つて最初のテーンと打込みました。市村座の方は九代目さんや五代目さん時代の打ち方をそのまゝ受けついで參つたものでありますが、どちらが正しいのでせうか、今のあひだに研究しておいていたゞきたいと存じます。「段切の太鼓」でこのおはなしも段切にさせていただきませう。

書評

隨筆「舞臺帳」安藤鶴夫著

能樂、歌舞伎、人形淨瑠璃の古典から新劇、輕演劇そして落語などに至るまで誠に廣汎な藝能世界に對してこの著者ほど深い造詣と鋭い鑑賞眼をもつ評論家は少なからう。その著者が愛するが故に或は歎びを感じ或は怒りを抱いてしみ〴〵と才筆をふるつた隨筆を一卷に收めたもの、卷頭の「瀧澤修について」やかつて本誌に發表された「山城少掾掌論」「春昇抄」や、さては五十數篇にわたる演劇人に對する素描の隅々まで近ごろ珍らしく心樂しい讀物である。

和敬書店刊・價二五〇圓（大西）

幕内秘録（二）

石割松太郎（遺稿）

◇ 新町の菊吾と大谷

新町の妓菊吾、鏡獅子をもつて大阪、神戸、京都、名古屋の各松竹座へ活動の間に出演。これは大谷竹次郎が後援で、名古屋にゐた時に北松のお女將の手で逢はせてゐた。この女中々の手だりもの、東京で評判のいゝのは大谷の力添へが爲めだとの事だ。

◇ 卯三郎

卯三郎何に限らず屹度よないを取る。死にしなの狂言が、延若の岡平（山科閑居）だつたが延若の病氣の故に岡平を卯三郎に持つて來る。奥役の田村が實は岡平をしたがつてゐる人がありますが本家は音羽家に持つて行けとの事ですといふ。この口上を聞いた卯三郎ソレはどうで播市だらうから御隨意にといふ。奥役案に相異、かういうて恩にきせてよないを廢めようとしたのだが、卯三郎は播市で成駒屋が納まれば結構ですとすましたもの、奥役困つてとゞとう千圓持參で岡平を卯三郎にしてもらふ。この狂言半ばに卯三郎は死んだ。すると松竹からその日に人が行きこのよないの日割割戻しを請求したさうだ。

◇ 仁左と小西來山

仁左衞門の昔の妻女おやす、播市（市川市藏）と昔姦通した。これと同じやうな役割の芝居が「來山」でその役が仁左と播市、さしづめ兩人は氣がさしたであらうと思ふ。

◇ 雀右衞門

雀右衞門金にてんたん、一生よないといふものを取らずその代り役についてはゴテ〳〵いうた。いゝ役しかせなかつた、そのよないは大抵奥役が懷中に入れたのだ。ところで雀右衞門の給金は二千圓也。どうみても他のふり合ひから千五百圓は少なかつたが決して金の事をいはしめなかたのが雀右衞門で、妻女は困つたが、一度仁左衞門が雜談の末、喜んでおくれ、うちの千代坊も二箱とるやうになつたといつたので雀右衞門感慨無量。爾來大谷さんは咄をしてゐても氣がおけぬが白井さんは氣がおけるといつてゐた。

◇ 雀右衞門と大谷

雀右衛門が東京へ行くとその給金、白井からは二千圓、が大谷の手からは白井へ五千圓で買つてゐる樣子、だから白井は決して給金を一度に京家に送らなかつた。

◆ 雀右衛門と山本帝劇

この雀右衛門を帝劇の山本が八重垣姫で買うとして京家が斷ると直接に來てその邊の事を匂はして出演のために損はさせぬとて金三千圓を別に給金外に送つた。この事あつて京家は五千圓で賣られて二千圓しか手金が取てない事を知つたといふ。

◆ 雀右衛門と東上

京家が震災後初めて東京出演を逃げてゐたが妻女の不在に來てとうとう口說いたが、畠貢先も罹災、金が入るから給金外に五千圓を出金せよと妻女はウチの電話でいへぬから自働電話で咄したといふ位、これを承知しながら松竹はイザといふ時千圓しか持つて來ないので、さりとて一旦よしといつたものを行かねば他の人が困るといふので出かけ東京で大谷の番頭井上に二千圓の借金をしたその歸りにあの死を齎らした病を得たのであつた。

◆ 雀右衛門と大谷

こんな事情を知つてゐるから東京の大谷は京家の女將に大阪の社長は死後よくするだらうが萬一意に滿たぬ處置があつたらばソツト私に知らしてくれとの事を申出てゐる。

◆ 片市の遺族

東京の片市の死後、大谷はその遺族に遺子が舞台に出ると否とに拘らず金二百五十圓づゝ毎月供給してゐた。否供給してあるといふ、白井にはこの情味がない。これらの京家と白井との對立の話は、筆者が京家の整理を頼まれて白井に談判したから聞込んだ實話である。

◆ 千代之助

仁左が千代之助を可愛がる事度をすごして千代之助有難迷惑。この千代仁左の子でなく貰ひ子、藁の上からだが、母は藝者で名を逸したが父は安田善三郎の善之助時代の子である。だから千代坊が旅へ行く時など安田から小遣を贈つて來るには千圓ある事度々、以てなみ〳〵ならぬ事が分る。

◆ 福助と兒太郎

福助（東京）は貰ひ子だが、歌右衛門が外で生ました子供。兒太郎は福助が家の女中に生ました子供、が歌の子として福助とは兄弟といふ事

◆ 白井の妻女

白井松次郎の妻女始末のいゝ人で

その白井家の風呂は松竹座朝日座の切符のカラで焚く、そのため人一人おいてあるといふ始末。水場、出物一切、妻女のもち、この上り高なか〳〵の事で妻女は金滿家。白井はプラスマイナスの勘定はどうなるか分らぬ。金が足らぬと妻女の許へ多田が使者となつて金をかりに來るといふ有樣。この妻女、タビを買うた事なし總て小切屋から持たしておこすみかんの數を調べるのも妻女。莫盆へ火を前から入れさゝず客の顏みてから入れさす、これで一杯分異ふといふ。繪ハガキは妻女のもちで一葉廿五錢の割で頭をはつてゐたが、雀右衛門が三千歳で死んだのでこの寫眞のちには四十錢四十五錢五十錢までに賣つてゐて、賣場は廿五錢の勘定、後にこれを知つた白井の妻女がこの愚痴を雀右衛門の妻女にいうたとの事だ。

◇ 豐澤松太郎

松太郎りんしよく也。朝太夫とゝもに文樂座に歸つたとき久しぶりの上方だといふので高弟新左衛門諸所へつれて行く。が一文の金を出したことなし。それはいゝとして樂屋で鮓を喰うても支拂はず大体新左衛門が拂ふ。よく〳〵支拂つてくれる人がゐないときは借りておく。翌日廿錢也三十錢也を新聞紙に包んで袖に入れて來る。これが小出しの金で他に蟇口といふものを持つた事なしといふ風。が、その胴卷には現金を入れてある。息子といへども預けぬといふ風。この京阪へ來たとき新左衛門夫婦で寶塚へ連れて行つたが家族風呂へ入らぬ。胴卷が氣になつて入れぬ也。新左の妻お筆これだけ師匠と思へばこそ盡すにと思ふ。むけむけといふたのでやう〳〵入湯したが二分とたゝぬうちに上つて來るといふのにはさすがに呆れたといふ。

◇ 成駒屋と巖笑

巖笑、雀右衛門、鴈治郎の三優の妻女が天下茶屋に別莊流行の時に坪八圓で土地を買ひくち引で三分する雀右衛門のがハシでよかつた故廿二圓で賣る。鴈のが巖笑に頼んで合せて大きくせんとして廿圓でさう〳〵巖のを買とる。その金を白井へとりに來いといふので巖笑の妻女怒る。

◇ 鴈と白井

右の土地がいつの間にか白井のになつて白井の道具庫になつてゐる。以て白井と鴈の經濟を知るに足る。

◇ 白井と吉兵衛

三味線の紋下野澤吉兵衛の死後、白井は吉兵衛の娘で白井の妾であつた咲耶の衣類を全部持つて歸つたといふ事だ。これは仙波辯護士の咄。

◇ 白井と多田

仙波辯護士の咄に白井は金の事よりも家屋などの債權設定額を喧しくいつた。これは何としても金の融通にするがためだ。この間に立つて多田前川などが金儲――盜人をするのだ。が白井と多田とが共に外出すると冬だと屹度多田の外套を白井に着せる。多田のラツコが三百圓からするといふ。白井のは百八十圓といふ、萬事がこれだ。

◇ 前川會計の女

神戸の藝妓で淺尾大吉の女、松竹の會計前川が妾にしてゐる。大吉の一件を知らぬ戎前川で大事にしてゐた。こんな前川などはどうして金を融通するのか考へればヘンな事だ。

◇ 吉右衞門と病氣

吉右衞門が何かといふと病氣〳〵と神經質にいふのは舞台が少し悪いと病氣だからといふ逃口上の爲だ。吉の病氣は病氣でもないとは白井松次郎氏の咄。

◇ 梅玉と白井

白井曰く「私など梅玉さんの金を借りたといはれた事はないが、私は梅玉親子の役は梅玉に相談する。給金も梅玉さんに渡すが、蔭では隨分福助氏へ金を貸してゐる。福助氏に役をさゝねばならぬくらい金は貸してますよ、今もそのまゝです」と苦笑

◇ 延若の東京の女房

東京の女房、初めは大阪と京都とは來ない約束だつたが遂にノコ〳〵來る。何れの宿屋もイヤがる、故はこの女昔は温なしかつたが東京で生意氣になりかんしようが多く一日に浴衣三度腰まき三度着かへ、湯は新湯でゾレ〳〵でなくば氣に入らぬといふ風。女中が病氣になるか歸へるかするので越路でも菊水でもイヤがる。京家へ持込む斷つたよし。この女はもと富田屋里榮の妹で里葉、井上周の妾であつた女だ。

◇ 雀右と齋入ら

大阪の芝居が盡く松竹の手に入らうとした時に俳優のため組合の組織を思立ち資本家に對立しようとしたのが福助、雀右衞門、嵐吉、齋入の右團次でこれが雀右衞門の所有の家で會合して、事務所を上町の右團次の借家をつぶして事務所にし、各自机などを持込んだが、松竹との話の衝に當るべく山森三九郎を傭うた。山森いつの間にか松竹に賣收されたといふ事だ。山森の位置がソレから上つたが、この策源地が雀右衞門方で福助が横町で車を捨てゝ雀右衞門の家へ來たといふ傳事話。

劇評

猿之助の操三番

「お國と五平」を簑助富十郎我當で出してゐるが、新解釋に走るに急で心理的な不合理に陷つてゐる。友之丞が變質者でなく、本當にお國を愛してゐるといふ解釋から出發して何とか合理的にまとめ上げようとしてゐるが、そのやうな先入見を演出家や俳優が抱いてしまつたため、より大なる人間觀照家としての大谷崎に見事うつちやられてしまふ結果になつた。本心から愛してゐるのならば何故生命とつりかえにその愛をあきらめようといふ條件を友之丞が出すのであらうか。まさか隣座敷の二人のむつごとを聞いて急にいやけがさしたのでもあるまい。

「毛谷村」といふ芝居も、妙なところに變な工風ばかりしてゐて、その癖役者は何のために何故そんな話をしてゐるのか、皆目判つてゐないやうなところがあつて、むしろ愉快だ我當の六助もよく調べてゐる個所もあるが、そんな變なところがやはり澤山殘つてゐる。富十郎もくさい仕科を相かはらずやつてゐる。役者も悪いが、歌舞伎芝居の毒血といふ奴だらう。

鴈治郎の「ちよいのせ」と「らくだ」一向にしでかさず、猿之助の「河内山」ひとり言を、しやべり、「橋辨慶」こけ間の棒のみ、「文七元結」の長兵衛味もそつけもない中に、「操三番」だけが、昔の鬼面人をおどろかすやうなところも無く、又足の指がそるやうな事もなくして唯單に身體が利かなくなつたといふだけではない、氣持の改まつたところが見えて、今月最上の出來榮え、とはまづめでたし。（武智鐵二）

敢て誤る者

—五月中座—

歌舞伎を誤る者が松竹だとは常々抗議して來たことだが「鷺娘」を見てその常識をさえ疑はしくなつた。いふ迄もなく「鷺娘」の象徴は白とあはれにある。町娘の踊等からして嚴たる規矩がある。これを新解釋によつて破ることは古典への冒瀆であらればならぬが、それがより以上の表現を得た場合は別として、今度のやうにせりあげや、目まぐるしい程の衣裳替へに終始して單なる踊のスタイルブック化した事は恐らく松竹の思ひつきであらうが、こんなものを命ぜられるまゝやつてゐる振附の藤間良輔と雛助兩人の頭の悪さにあきれるばかりである。

「踊り供養」は岡鬼太郎の作といふが、狂言「塗師」が原曲である。氣

の利いたもので特に出演者が伸び伸びと踊って、簑助の平六の輕さもよいが、我當がアト役の師匠を樂しさうに踊ってゐたのが人のよい一面を見せてゐた、しかしもつと扮裝は考へるべきである。

「油地獄」を見て近頃出來の脚本と違って、一貫した、各人の性格と事件の推移の妥當性にくるいのないのが力强い。壽海の與兵衛は上方的體臭のないのはやむを得ぬとしてそれに對する努力は認めていいが、序幕で持ち味が生硬なので後半が引き立たなかつた。菊次郎のお吉は此の役の暗い宿命の影がないのであはれが尠ない。成太郎といふ絶好の役者を逸してゐるのは惜しい。子供と夫の顏がともすれば閉じやうとする目にうつるあはれはお吉と、父母の面影が目先にちらつく與兵衛の相爭ふ殺し場の凄慘さが、絹を敷いたりしてまで二人はその滑る型に多く氣をとられ內容が空虛だつた。これでは簑助の養父德兵衛が性格描寫に成功して第一の出來である。

上方の近松に對して江戸の默阿彌の「吉樣參由緣音信」は腹の薄さが目立つ。しかし初演は知らぬが、この薄い腹から尙段々色薄くなつて、意氣だけで見せる物になつたが（菊吉）我當の吉三、簑助の辨秀、ともにより小型で、前者は圖太さが不足し後者は小惡黨を顏面神經と科白だけにたよつてゐたのはいけない。

「盛綱陣屋」は壽海が吉右衛門ばりだが、所詮座頭役者になれぬ壽海の限界にとゞまつたもので、吉の意氣に遠く及ばず、型にしても間のよい吉に比し徒に說明的で、これは意識しなくても間がもてぬからそう感じるのだ、他の役にしても簑助の和田の形だけで肚の伴はぬこと菊次郎の篝火の情のなさ、新之助の微妙の小芝居らしさ等皆よくない。壽子の小三郎と、我當、延二郎の注進、吉三郎の時政、成太郎の早瀨等がいゝ方である。

第一の「輝虎配膳」はどうにもならぬ愚劇、追ひ出しの延二郎と鶴之助の「吉原雀」は嫌味がなかつた丈に「驚娛」の口直しになつたといふ所だ。

（沼　艸雨）

劍劇の亡靈

―建直らぬ新國劇―

新國劇が更生二十周年記念と稱して「大菩薩峠」を上演してゐる。有樂座はこれで近來にない大入りださうだ。これは七月に寶塚へ持つて來る筈である。

「更生」とは何かと訊いたら、澤正歿後、辰己、島田を押し立てゝ沒落から立直つたことをいふのださうである。戰時中さん〳〵軍部のお先棒をかついで御用劇をつとめて來たの

が、戰後、俵藤理事らを逐ひ、辰己島田濱田の三頭政治で民主的に建て直したことではなかつたのであるそれでこそ、相も變らぬ劍劇の新國劇なのだ。

こゝ一二年來、現代劇を何とかして行かうとする努力は、新劇團は別として、大衆劇團では、新國劇が一番力を入れてゐるのではないだらうかと思つてゐた。果してよい芝居ばかりやつたわけではないが、「王將」とか「文樂」とか「おもかげ」などの收穫は認めてよいと思つた。

さういふ新作を手がける一方、作が間に合はないこともあるのはわかるが、相も變らず「國定忠治」であり、「月形半平太」である。「宮本武藏」も改訂と稱して再演した。そして又々「大菩薩峠」である。

それぱかりでない。えらく御自慢らしい「どぶろくの辰」でさへ、辰の人間性追求なんぞでなく、土方を使つた劍劇なのである。新撰組の血なまぐさい刀の代りに、北邊の外人部隊みたいな土方がツルハシをふるふ立廻りなのである。

「文樂」「王將」などから、劍劇に代るべき藝道物を專念手がけて行くのかと思つたが、その次に出たのは何と「殺陣師段平」であつた。藝道物といはゞいへるが、これも劍劇の變種なのであつた。新國劇初期からの當り狂言「國定忠治」の小松原の立廻りを創案した段平の物語に託して、やはり新國劇のお家藝たる劍劇の由來を神話的に謳歌したものであつた。だから「殺陣師段平」は、藝道物としては前二者の二番煎じでしかなかつた。

正月に大阪歌舞伎座で「どぶろくの辰」を出し、四月には京都南座でその再演と「殺陣師段平」を演じ、辰己を映畫撮影に送り出した留守部隊で五月末から六月初めにかけて寶塚中劇場に「白野辨十郎」と「國定忠治」山形屋を出した。

辰己一人がゐないだけで、何と新國劇はさびしくなるものか。島田以下が揃つてゐながら、寶塚ではまるで留守部隊の感じだつた。そして、島田の低迷が、たとひロスタンの原作の「シラノ」にしても、さほど高邁な作ではないにしろ、しかもその中から通俗的な興味の趣向だけを拔いた飜案物の「白野」であるにしても、あの劍客にして詩人、洒落者にして——といふ愉快な人物を、まるでロッパの演ずるやうな、たゞの喜劇の道化役にしてしまつてゐたのにあきれたのであつた。

新國劇はまだ劍劇の亡靈にとつつかれてゐる。これを拂ひおとさぬ以上、ほんとの「更生」は出來ないだらうと思ふのだ。

（北岸佑吉）

「須磨の仇浪」劇

―歌舞伎座の新派―

五月の歌舞伎座は新生新派に中村芳子の特別出演といふ看板と琵琶入りのお涙頂戴劇「須磨の仇浪」とが物を言つて相當の興行成績を收めたのは御時勢といふ他はない。

「須磨の仇浪」劇は往年千日前樂天地（現歌舞伎座の前身）で木下吉之助が所謂連鎖劇で大當りを取つたもので自分も見た記憶はある。これが長谷川幸延の手で昭和版として再び現はれたのであるが所詮「須磨の仇浪」は「須磨の仇浪」に終るものであつて、花柳、大矢等がお附合で出てゐればゐる程一層時代錯誤の感を深めたに過ぎない。中村芳子の復歸もこんなものをやらされたのでは意味がない。體力的に見ても紅梅に押されてゐるので損であつた。脚色で氣のついた事は序幕で紅梅の絹子が出て來る途端に底を割つてしまふのであとを見るのが辛くなる。大詰で上手に琵琶がスポットで出ると「待つてました」と來るのだからお目出たい限りである。

お涙頂戴でも「春琴抄」の方は花柳喜章の二枚目利太郎さへ目をつむつてゐればまだ辛棒出來る。大矢の佐助が容色的の難を除けば矢張見られるし、花柳の春琴も大詰など大分大芝居でイヤだが時間的に言つて、「仇浪」劇よりは助かる。

「梅ごよみ」では喜多村の衰えに吃驚した。特に脚の疾患がひどいとか聞いたが見辛い位であつた。大矢との立廻りのところなどハラハラさせられた。大矢秀雄のお蝶をほめてゐる人があつたけれど春本の丹次郎以上に未熟である。花柳が現はれぬと一向に面白くならないのは困る。現在の新生新派は猿之助劇團と似てゐると思ふ。座頭一枚看板では客が來ない。混成軍で出し物を餘程考へないとひどい芝居になる。（林 秀雄）

新劇への不滿

―民藝の「山脈」―

今日新劇がギゴチナイ存在になつてゐる一つの原因は、日本の新劇が昭和の初期に或程度スクスクと生長し軌道に乘つたかの樣に見えたが、その後プロレタリア演劇の擡頭で横道にそれそれからは「輝やかしき聖戰」なるものに依つて完全に窒息されてしまい、敗戰によつてやつと呼吸を吹きかへしたが行く途を忘れたのか、嘗て新劇華やかなりし頃にあくがれて新劇復興の足場を昭和初期のそれに直結しようとしたことにある。そこに誤算があつた。今日の社會情勢は昭和初期の社會情勢とは丸で異つてゐる。それが考慮に入れら

れてゐない企劃だから、新劇が今日の社會情勢から見てギゴチナイ存在なのである。

遠い昔は知らないが、歴史的大變動の後には何かしら藝術活動に新様式が生れた第一次世界大戰の後世界の演劇――いやあらゆる藝術現象もそうであるが――は目を見張る様な大變化をして前進、前進、世界演劇史上に輝かしいエポックを作つた。日本の敗戰は前大戰が歐米に與へたショック以上のものだと思ふ。それなのに日本の演劇は丸で蛙のつらに水だ。裕然とやをら立ち上つた、意氣のない事おびたゞしい。

民藝の「山脈」を考へる時に先づ筆者の頭をかすめたのは、しかく好評を博したものを、なぜ心からその好評に同調出來なかつたかと云ふ事で、これはあながち天の邪鬼な考へ方ばかりではない。上述の今日の新劇に對する不滿が又此「山脈」にも云へるからである。

作者木下順二に對してはその「風浪」以下の作品の劇作の構成、技術の優秀な事に就ては多大の尊敬を拂ひ、今度の「山脈」が雜誌に發表されると逸早くむさぶる様に讀んだ。今日劇壇に欠けてゐる物は優秀な劇作家だ。かねて囑望してゐる作家の新作の發表は全く旱天に慈雨の思ひだ

さて民藝の舞臺を朝日會館に見た瀧澤修、山本安英、森雅之、宇野重吉、望月惠美子、その他登場のいづれの俳優も適役で好評の通り一二の瑕瑾はあるにせよ完璧に近い好演技だつた。此劇を思想的に或は心理的に檢討し、各俳優の演技を考察しても大して見當違いの解釋はなく、戯曲に渾然と溶け込んだ名演技にも拘らず、觀劇後の印象に甚だ物足らなさがあつた。それは此完璧が昭和初期の新劇に對する幻影の完璧であつて、總ての點で打ひしがれた今日新劇に求めてゐるイリュジョンではなかつた。そこに不滿がある。

戯曲の内容は戰時中、敗戰後の社會情勢が語られ、そう云ふ時代の苦しい戀愛の事が語られてあるにも拘らず、ヒシヒシと身にせまるものを覺えない。俳優の巧好適切な演技もいたづらに眞劍を大上段にかまえられた思ひで、觀客は只重々しい感じで見終つたといふ不滿がある。これは一部新劇愛好家の觀劇態度かもしれないが、新劇が民衆のものとならうとするのには好しからぬ態度である。演劇はあくまでも民衆のものでなければならない。これからの新劇が一部愛好者の專一物となる事は新劇に取つて致命傷である。

「山脈」はあらゆる點で最近上演せられた現代演劇の中で優秀なものであつたのに拘らず、觀劇後の不滿は上述の點にあると思ふが、尙その上に此劇にサムシングニユウが發見せられなかつた事が何よりも淋しい事である。

（升屋治三郎）

「わが町」への疑問

第一幕では人間の日常的な生活、その中にある若い者の戀愛を――第二幕ではその男女の愛と結婚を、そしてその中にある微妙な人間心理の混亂を――と云うコースで見て來ると、第三幕目では結婚した者同志の成長した姿か、或は破綻か、どに角結婚生活後日物語を期待するのに、突如死によつて二人は距てられ、死後の世界と現實生活との對比と云つたような突飛な發展のしかたで、三幕目を見て分らなくなつてしまつたと云う若い人の感想を聞いて成程と思つた。

だが「わが町」の面白さもそこにあるのだと思う。つまり作者は第三幕目に盛られた思想、それは一種のキリスト教的死生觀、永生觀から、現實の人間生活を微笑ましく愛情を以て眺めているのであつて、あの一幕二幕は、三幕目以後の眼を以て、振返つて眺められたものでなければならない。

そうした觀點から文學座の「わが町」を觀る時、一應のとゝのいはあるけれども、處々疑問やら不滿やらがないわけではない。例えばあの進行係は全部現在型として扱はれていたけれども、やはり三幕以後の立場から過去の出來事として一幕二幕の進行を司るべきだし、作中の人物と同格の高さから、作中の人物を横から觀察しているのではなく、作者の目の高さから、作中の人物や出來事を上から見ていなければならない人である。三津田の進行係は神妙にやつて居り、悪い出來ではないが、アメリカ人になる事より、作者の目の高さになる事に心を配らなければならない。それは三津田だけでなく、殆どの俳優があの作者の氣品高い哲學的ものゝ見方にまで追ついていないからの事だとは思うが、とに角あの作品の構成の面白さに觀る方も演じる方も呑まれていて、作者の云をうとする核心に鋭く觸れていない悶しさが、與える印象を散漫に、或は斷片的なものにしているのだと思うとに角面白いには違いないが原作紹介の範圍を出ていなかつたようだ。それでも充分意義のある事ではあるけれども――。

（梅本重信）

◉土筆會の第一回 鯉昇、太郎、莚藏、紫香等に若手十餘名が五月二十二日千鳥屋で脚本朗讀會をした。師匠番の聲色まがい等もあつたが大体に於て眞劍なこと、大幹部より上、莚藏の對面の十郎、靖十郎の勢揃の辨天等たしかにもしほのその役よりは科白の限りに於ては優れている。太郎の五郎も染五郎のより息がつんでいた。此の層を善導する事に明日の歌舞伎の僅乍の光りがある。（S）

能評

お東の遠忌能

京都で今年の上半期の大能といへば、さきの杉浦還暦能と四月廿六日の東本願寺蓮如上人四百五十年遠忌能であらう。大能といつても世間的に大がゝりなだけで、前者にはまだ華雪、久太郎を嚙み合はせたのに意義を認めるが、これは全く法要の賑かしに流儀を並べたゞけで、白書院の本格舞臺も、文字通りの善男善女がひしめいては鑑賞ができない。

初番の「東方朔」は金春光太郎が休んで例の通り信高の代勤。珍しい上に大仰な曲で、狂言開口があり、ワキは眞之來序で出る物々しさ。その實、内容はお伽噺で、間狂言には桃仁の精(茂山千之丞)が大勢の仙人に嘗められて種ばかりになつてしまふといふのが、この能にも共通したものが流れてゐる。それに、信高もなかなか位どりに氣を入れてゐたので、まづまづと思つてゐたら、後には悪尉の位はとり得ず、樂はずつとツレとの相舞だつたが、どうにか濟ませたといふところ。ワキの岡治郎右衛門はこの曲に入り得てゐた。

「敦盛」二段の舞——片山九郎右衛門。万年若衆として相應しい曲。この小書による花入りの草刈籠では娘にしたいところ。博太郎、保壽、嘉久の三少年も揃つてゐる。後ジテがクセ前に床几にかけて袖をおろしたのも實に少年らしかつた。クセで一の松へ行く型も味がある。舞は小書通りに短くなる。後の番組に舞のある時につける小書のことで、簡潔になつただけ、さらりとこの日の首位を浚つて行つた感じだつた。

その後の舞といふのが「道成寺」古式——金剛巖。恐らく五十何回目かだらうから、亂拍子も小鼓の林吉太郎を引張つて堂々と踏み、餘裕を見せて鐘にとび入つたが、身をひねつた刹那、すれすれといふ際どさだつた。後の赤頭はシヤグマといへるほどな不動頭が幾褪色した緋地に金の鱗箔の着附によく合つてゐる。面は赤般若。かういふ効果が大いに援けてゐる。祈りからの動きも面白かつたが、橋懸りへ走り込んだ時は力が拔けて龍頭蛇尾といふ洒落になつてしまつた。恐らく健康が許さなかつたのだらう。このあざやかな道成寺も、これが一世一代だらうと首肯されたことである。

「鉢木」は寶生九郎。襲名後初めての見參である。名と共に藝格も上るなら結構だが、「降つたる雪」の出はまづまづとしても、ワキを呼びとめる情感は全く出てゐなかつた。あの巨軀が榮養失調の源左衛門に見えなければいけないのだが、後も棒かつぎの壯士にしかされなかつた。いつ

か眞船豊の劇で彼のレコードをかけて聽かせたシーンばかり思ひ出されてゐた。

切は「土蜘」千筋之傳――金剛巌天見ずに歸つたのだが、後で聞けば、お家藝の欄干へ飛び返る型もなかつた由。ちようど薄暮になつて、怪異出現の情景にお誂へ向きなので期待したが、何の妖氣も出ず、千筋の手際も血筋を疑ひたくなつたといふ報告であつた。

（北岸佑吉）

觀尙會能と新樣式能

觀世流未來の藝術的盛衰を左右する人達のあつまりといふ意味で、觀尙會能は注目されたが、弱冠清壽に玄象をふつたり、獨鼓が病氣休演のため喜之が羽衣を代勤したり、企劃の無能や事故のために、その意義を失つたのは殘念であつた。銕之丞のグロな直面を見せる正尊を、美青年の清壽に勤めさせ、銕之丞は玄象の能面のかげにかくれた方が、藝術的成果も興行價値も上つたらうに。太鼓小鼓の不調の關係もあつて、清壽の玄象を見てゐる内、能樂といふものは結局ジヤワあたりの土人の踊りと質的差異はないのだらうといふ想念にとらはれた。それは例へばメリの踊り程本質的でないといふ意味に於てだ。尤もこの忘念は戰後日本人に共通な劣等感から出たものだらうが、このやうな劣等感コンプレックスの逆作用としての誇大忘想が、朝日會館の新樣式能を生んだ母胎でもある譯だ。

その新樣式能、いよ〳〵觀世流の登場となつて、片山九郎右衛門が井筒をつとめた。照明の穴澤喜美男のすぐれた美感覺が、能衣裝から可能なる一切の美を引出して見せて驚嘆させた事もあつたが、もう彼自身情熱を失つてしまつてゐるらしく、又多少は能が生半可に判り始めたこともわざわひして、燃え立つやうな色感の美はもう失はれてしまつて、惰性的な職人仕事だけの事になり了つてゐる。それよりカーテンが降りる間際になつてワキが立上つて歩き出したのには呆れた。何のためのカーテンぞや。それ程までに能の原型を見せる事に汲々とするのなら、何も新樣式能を始める必要無し。或ひは歩きたければ幕が降りてから勝手に歩けばよいだらう。片山の主張だつたさうだが、彼らしくもない見下げ果てた根性である。前シテのために「かくれけり」と下居する型があるが、照明をそこで落すのだつたら、この型は不要且無意義になる。このやうに在來の型を再檢討する要を生ずる所に、新樣式能が在來の能樂と本質的に相違する點があるとする私の主張が裏づけられる。金剛巌は天

鼓」の半能。半能の精神は新樣式能の精神と最も背馳するところ。見てゐて唯テンテコ舞といふ熟語を思ひ浮べただけ。

元へ戻つて觀尙能、喜之は「羽衣」と「隅田川」とを舞つたが、演劇的能樂こゝにありといふ意氣を見せたつもりかも知れないが、ワキへあしらつてグニヤリと色氣を見せるやうな天人では、橋掛で「ソラゴト」と言はなかつただけが見つけものであらうし、いくら大げさなふりをして見せても、「ノウ舟人あれに」の氣持のかはり目がはつきりしないのでは、狂氣の內面的充足への描寫とはなり得ないであらう。之を要するに觀世流を尙ぶ前に、まつ藝術自體を尙んで貰ひたい。（武智鐵二）

六平太の「景清」

―各會の能集成―

松門の謠出を鎧の古い糸が千切れるやうに謠ふといふ流儀の主張が、全曲を一貫した主張である所に、武道派喜多の面目がある。それに人間性を強く與えてゐるのは六平太の腕である。盲目の故に心の目を働かしてトモに問はれて「げに〳〵さやうの人」といふ間にも空間にも、二人が失望して去るのを心で見送るのも皆深い愛情の惱みが見えた。ワキが出てからは流儀の激しいまでの强さが目立つて、例えば「惡心を」と左手で膝をつき「腹立ちや」とその手を右に持つた扇で音をさせて打つのや「かたわなる」とためておいて「許しおわしませ」の柱の方によせて扇と手で合掌等は歌舞伎でいへば吉右衛門流の演技過剩で、こゝらをグツトしめておいて後の語りで鮮かさが見せてほしかつた。尤も、六平太の語りは面白いもので、一々書く煩は避けるが、鮮かさ無類、あれで地との氣合の一致があれば天下一の名に恥じぬものであらうが、地頭の實との間隙は、理論派、實行派の相違であるが、對面の前等は地の荒さから一層シテをいら〳〵させたやうに見えた。

ツレの長世の變に女らしい聲にしない正攻法は賞していゝ、それと大の川崎九淵が久々の顏合せの緊張で物凄い氣合を見せ、波の音をきく所に葛野流だけにある「波のアシラヒ」名稱は違ふか知らぬがチヨチヨンと入れたのが如何にも遠く波の音を思はせ、柱にすがりきくシテと共に能の限界に於ける最高の感興を與へた語りでもこの大鼓の働は大きい、兩名手健在なりを思はしたのがこの景清である。

和島富太郎の「道成寺」の披きは近頃の觀世の無氣力なそれから見るとこの流らしい電擊的、鋭角的で氣合のこもつた賴母しいものであつた巧拙を超越して青年らしい純眞さは

氣持がよい。曾和博朗の小もシッカリして亂拍子も始終氣魄を保つてゐた。後は祈の後「謹誓東方」で流儀の約束によつて型が間を持ちにくゝ出來てゐるので、此の若いシテはそこに破綻を見せたが先づいゝ出來といえる。

仕舞を實、長世、節世三人が舞つたがいづれも觀世等の生ぬるい青年さくらべものにならぬものだが、能があゝしたものであつては面白さがない。あれは武士が仕舞を舞つてゐるので能樂師が舞つてゐるのではないと私は考える。能樂師の舞ふ仕舞が見たいものだ。(四月一日喜多會)

小寺一郎の「翁」の披きは、謠のハツキリしていたのはよいが神ガクでの天地人の拍子が堅くなりすぎて後の禮等も袖をアシラフのが一つの型のやうなやり方はいけない。千歳は腰がきまらずキツパリしないのは困る。(四月二十四日上野松諷會)

東本願寺白書院舞台に於ける蓮如上人四百五十年遠忌記念能は、先舞臺と環境のよさが能の價値を倍加した。能では金剛嚴得意の「道成寺」が往年の覇氣なく、古式の小書で短かくなつた亂拍子もも一つだつたがこれは小の悪さにも影響された。鐘入も鐘のつり方が舞臺の都合で悪るかつたとかで嚴にはかつてない手ぬるいものであつた。後は疲れてはゐたが不動頭に赤般若、赤鱗箔等目にさやかな色彩を與へてくれたが嚴老いたりの感はいなめない。それと地も亦此の時、此の曲、此のシテ、此の顔ぶれでこれでは流儀の前途暗たんたるものがある。

これにつゞいて新實生九郎(重英)の襲名後關西初出演の「鉢木」實生家元のこれはよく出ているので自信があるのであらうが欠點もない。只型として薪の段で梅を斬るのに扇を後見に渡し小いさな切出しのやうなものを持つてした悪寫實と、これは脇の問題になるか知らぬが「安堵にとりそひ給びければ」と敎書を投げずにそのまゝ持つていたのは曲がないことだつた。此の曲も御多分にもれず地がよくない。しかし素人の多い割にはまだいゝ方だつた。

此の間の内、フレの方は千之丞、「コケマイ〳〵」や「おつと落馬した」「アブナイ〳〵」が小いさくて近くにゐる子供にいふやうであつたのは一考を要する。太刀持の大藏彌太郎が「諸軍勢の中に」と白洲を見廻した折舞臺と見所の直結を最もよく感じた

切は金剛滋夫の「土蜘蛛」千筋、お家藝の勾欄越しの宙返りがなかつたのは淋しい、若太夫としてからした曲にはやつてほしいものだ、その上に巢が貧弱、これは屋内と違つて野外同樣の舞臺で離れて見てゐるからとの釋明もつくだらうが、その巢の先に氣合のないのを指摘するのだ脇の彌三郎がシテに輪をかけた氣のなさ、地も悪く、切能をこんな陰々たる氣分で見た事は珍らしい。(四月二十六日)

梅若六郎、武久の「松風」といふ曲といゝ、人といゝ梅若最高のもの

が此の位では心細い、總体のキメが荒く、地も粗雜で、ツレがシテを止めるのに氣がぬけたり、シテも、作り物の外を廻る足が荒かつたり「吹くや後ろの」で腰が落ちていない等獻目を出すところが多かつた。安弘の「天鼓」弄鼓ノ樂は前の方が整つてゐた、鼓を打つてからはきくのみで、下がらなかつたがその氣分は感じられた、こゝでワキが心して聞く型があつたが、定めではあらうがあれはシテの領分の演出だ。（四月三十日梅若會）

銕之丞の「橋辨慶」はかつてその安定感に打たれた事があつたが、やはりその點がよく、長刀の強い鮮かさ等、歌舞伎のある者に見せたいものがあつた。子方の万紀夫が急病で山本順之に變つたので一、二手順に於て隙を生じたがその日にいつてやれる順之はやはり天才である。シテとして氣になつたのは「さあらば今夜は思ひとまらうずるにてあるぞ」と面を伏せて一つ打つてトモを見たのは仰山に感じた事だ、地は万三郎が獨りで謠つた。稀曲の「住吉詣」は椎光の井上嘉久が道行で倒れ、立衆の中から上野朝太郎が代つたが、あの急場常に出ないものをすぐ變つた上野は面目を立てた、さるにても副後見が裃でやつてくれたらどの位よかつたかしれないが――シテの上田隆一は病中とていはず、源氏の清麿は、本人は直面を嫌つていたが、初冠、直衣、指貫の姿で秀麗な青年が扮しているにも拘らず、能の源氏といふ典雅には生々しさが目立つたこゝに能の皮肉がある。次いでの華雪の「隅田川」はよく見、よく聽くと勿論本格で、鉦のあたりの情味等は得がたいものがあつたのだがあの舞臺、あの環境ではどうしても融けこむことが出來なかつた。こうした所ではやはり切の「葵上」等がいゝのであらう。小書の梓ノ出で短縮と合理化の上に空ノ祈で裝束の目新らしさと型の面白さがある上に万三郎の品と力強さは「恨めしの心や」のつめ足や「かえらぬものを」と常座でかゝえ扇をして下居し「尙も思ひは」の所で扇ごしに見るのや「枕に立てる」で小袖の頭につきさすやうに扇をすてる等鮮かなものがあつたしかしこれで万三郎に注意したいのは腰の入りすぎることだ。梓ノ出で幕を離れた折でも餘り腰が入りすぎてゐるので何か物をさがしてゐるやうであつたり、總てに老ひが見えてこれは前回に見た「花筐」でも感じた事だが、先万三郎晩年の腰の入れ方をそのまゝ眞似てゐるのだが、華、今が盛りの新万三郎が何を苦しんであのやうに美感を捨てやうとするのか、諒解に苦しむものだ。（五月二十九日寶塚能）　沼　艸雨

觀魂座談會の内「輪藏」は明治以來始めてだらうといつたが大正十一年五月大西信久が勸めてゐるさうだから追記しておく。

照觀

友右衛門、藏前のお染の人形ぶり大出來。井上流や文樂を恒に研究しておいたおかげ。勉强は不斷にせねばならぬもの、武智君など涙を流さんばかりの喜びやう。いやこれも御尤も、〳〵。（念者の念者）

×

吉右衛門、名古屋まで來て京大阪へは出ない。京美人H子と嬉しい仲になつたのを妻君が妬いて寄さないのだといふ。藝術家の戀愛を阻害するやうな女房は離緣してしまへ、播磨屋！（藝術並に戀愛至上主義者）

×

お岩樣で上京する鴈治郎、どうせ恥さらしに間違ひあるまい。いづれ無謀な政策の犧牲だらうが、なんとか留めてやる工夫はないものか知らん。（權兵衛）

×

去年はりまやが大阪で引窓を出したとき、アテらが東京で辨天小僧をするやうなもんどすがナ、と自分でいうてはりましたもんなァ。（お袖）

×

ところが御本人、大はりきり、とはどんなもんです。やつぱりヒロポンの御利益ぢや。（與茂七）

×

さすがに會長はんも、アホやな、いうてなさつたやろ。（まがイ菱）

×

まだ〳〵デッカイお岩樣が出まつせ。（白猿）

×

彌太良會のメンバー大學東京を襲ひ、狂言にメイ演技を揮ひ、東京の温和しい劇評家能評家連の心膽を寒むからしむ。それだけの事なら觀照欄にのせる必要はないが、それに關聯して大藏家元の立派な言葉があるから紹介したい。（幹事）

×

今回の會にI・O兩氏が缺勤されました。お二人ともお素人で、恥しいといふやうなお氣持だつたのでせう。私も自分の藝事が到らぬ故と思ひ大分煩悶しましたが、ラヂオの素人ノド自慢を聞いて飜然と悟るところがありました。つまりお二人とも鐘を鳴らし、巧い拙いをきめるあのやり方の惡影響をうけ、それでまづければ恥しいと一圖に考へられたのではないでせうか。藝事といふ物はそんなものではありません。師匠たる私が舞臺の出來榮の結果については全責任を負ふのです。お二人とも旦那衆のやうに、お上手だとか何とかおだてゝ、おすゝめすればなさつたのかも知れませんが、私にはそんな眞似は出來ませんし、唯現代の風

潮の悪影響をお受けになられたのをお氣の毒に存ずるばかりです。（大藏彌太郎――但し文責在記者）

×

「能樂兄弟座」御目見得致しましてございます。相勤めまするは、實太夫、得太夫。東ォ西イ、トー。（喜）

×

あれはノーラクケッタイと讀むのだッしやろナ。（御兩ハン）

×

昔は「座」とは申せなかつたのだが自由主義の世の中は有難いもんぢやて。（故老）

×

集團入黨もできるヨ。（先輩）

×

昔、大西亮太郎が道成寺の鐘の中でラムネの音をポンといはせたのを森田操が聞きつけて問題にした。こないだ金剛巖が鐘の中で自らカンフルを注射したと聞いてみんな感心してゐる。（眞子庄司）

×

西宮の能樂會館の建設で邦樂關係者に呼びかけねばならぬと理事者が訴へてゐる。最初に意氣ごんでゐたのは何者だ。（戎三郎）

×

觀阿彌祭の能では初番からワキが代勤、富士太鼓では家元が彌三郎に代を命じて歸り、その又彌三郎が松井に押つけるとは福王流もたいしたものになつた。なめられてゐる大阪樂師の顏が見たい。（苦沙彌）

×

文樂の勞組と因會とが解散して新組合を結成するとか。あんなに感情のもつれたものは所詮合せものは離れもの、昨年六月の勞組結成以前より遙かに悪い狀態にオンノシマハシテ、コンノギモンドスだ。（松右衛門）

×

兩者がもとの白地で手を握れまいと見透しをつけた綱太夫の賢明が證明されるかも知れない。何も詫びを入れてまであはてゝ歸る組合でもなからう。（ヤジロー）

×

綱太夫脫退から山城會の出演を拒絶すると聲明した側には確か山城の弟子筋のものもあつた筈、これは何といつて詫びを入れる積りか。（かりがね）

×

こうなると松竹に解決の誠意があるかと疑ひたくなる、とムキになる勿れ。何とか遷延させるのが會長さんへの忠義ぢや、と思うてゐる白鼠のセイなのが眞相だ。（升男）

×

文樂座は倉庫にするのもよし、實驗劇場に貸すといふ手もある。沒ぶれた人形なんか寄席にでも出すのがせいぐだらうテ。（孫三郎）

觀照

化膿症に
アルバジル姉妹品
スルファミン錠
ゲリオン錠
扁桃・腺炎
中耳炎
蓄膿症
齒槽膿瘍
化膿性外傷
丹毒・面疔
急・慢性淋疾
山之内
山之内製藥株式會社

編集後記

歌舞伎の不振をよそに舞踊界は花一時に開くといふ有様である。この時にあたつて口の重い三津五郎が、その信念から述べた「をどり閑話」は無反省に、只型を踊つてゐる群少舞踊家に大きな示さを與へるものである。石割氏の前號につゞく「幕内祕錄」と共に敢て特集と誇るにふさはしいものだ。

近來能評が少ないといふ讀者の希望に答へて、「未熟なるそれがし」が大部分を書いた。同人一同の不勉強もさることながらいゝ能があれば見なといつても皆が見る、書くなといつても書くのだから、結局は見たい能が少ないといふ事になる。しかし能は捨てない今亡ぼしてはならぬ。

（沼）

觀照　第二十二號
印刷兼發行人　沼博一
大阪市西區江戸堀上通二ノ四三
印刷所　福田堂印刷所
大阪市東區道修町二丁目十一
林秀雄方
發行所　觀照社
（像約概算半年百八十圓）
本號頒價　一部　金參拾錢